2022 年度 小委員会活動成果報告

（2023 年 2 月 15 日作成）

小委員会名	都市史小委員会	**主 査 名**：松本　裕 **就任年月**：2018 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	建築歴史・意匠委員会	**委員長名**：山﨑　鯛介 **主 査 名**：
設　置　期　間	2022 年 4 月　～　2026 年 3 月（*開設 1999 年 4 月）	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	①　既往の都市史に関する研究を分野ごとに収集、蓄積し、研究の到達点の認識と今後の研究活動を明確にする。 ②　時代・地域別の都市史研究を横断的に繋ぐとともに、方法論を豊富化するための研究会・シンポジウムを定期的に開催する。 ③　外国人研究者の招聘等を通じて、都市史研究における国際交流の活発化をめざす。 ④　従来分散的に行われてきた各時代・地域の都市史の成果の蓄積を横断的かつ総合的にとりまとめ、公開シンポジウムの記録冊子、研究文献リスト集、出版物（たとえば都市史叢書等）によって公表する。 初年度(2022/R4)は、前クールで計画していたシンポジウム（新型コロナ禍で 1 年延期）を開催した。 2 年度(2023/R5)は、新規主査のもと、新しいテーマを検討し、シンポジウムの実施を目指す。 3-4 年度(2024/R6-2025/R7)は、大テーマに沿って毎年個別のテーマを設定し、シンポジウムを開催する。また、今年度最終回を迎えた「都市空間の物質性」についての学会大会研究会開催実施を目指す。	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：　無 主査：松本裕（大阪産業大学） 幹事：初田香成（工学院大学） 委員：青井哲人（明治大学）、赤松加寿江（東京大学）、伊藤裕久（東京理科大学）、岩本馨（京都工芸繊維大学）、大田省一（京都工芸繊維大学）、片山伸也（日本女子大学）、栢木まどか（東京理科大学）、岸泰子（京都府立大学）、高村雅彦（法政大学）、中嶋節子（京都大学）、中島智章（工学院大学）、松田法子（京都府立大学）、松山恵（明治大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	2006 年度より若手研究者の参画と研究対象分野の拡大を企図して WG を結成した。以降、毎年継続して年 6 回～8 回の研究会を主催し、若手研究者を中心に研究発表と討論の場を設けている。その成果はシンポジウム運営に活用されている。	
2022 年度予算	180,000 円	**ホームページ公開の有無**：　無 **委員会 HP アドレス**：

項　　目	自己評価
委員会開催数	1　回
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等）	1. シンポジウム「都市空間の物質性（マテリアリティ）」シリーズ第 4 回：テーマ「物質性が示す都市のかたちとイメージ」を 2023 年 1 月 18 日に対面形式にて開催した。当企画は、2021 年度にシンポジウムとして開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により 2022 年度に延期開催した。　参加者数 26 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	1.　設置目的①②に関しては、開設以来毎年開催している主催シンポジウムにおいて、「都市史研究の可能性」「殖民都市」「日本の都市の特質」など重要なテーマを設定して、研究成果ならびに公開討論を実施してきた。2002-2005 年度にかけては「転換期の都市（古代⇔中世⇔近世⇔近代⇔現代）」、2006-2009 年にかけては「都市と建築」、2010-2013 年は「都市と表象」、2014-2017 年は「都市と大地」をテーマに掲げシンポジウムを開催した。2018 年度からは新クール［第 6 期］に入り、「都市空間の物質性（マテリアリティ）」をメインテーマに設定し、シンポジウムとして、2018 年度「都市・建築と物質のあいだ」、2019 年度「旅の媒介装置　物的環境が拓く関係性」、2020 年度開催予定であった「歴史記述とフィールドワーク」は、新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み 2021 年度に延期、順延で 2022 年度に最終回「物質性が示す都市のかたちとイメージ」を工学院大学にて対面開催した。 2.　設置目的③に関しては、2000 年度にリチャード・プランツ(Richard PLUNZ コロンビア大学教授）氏を招き、特別講演会『ニューヨーク都市』を開催し国内外の研究者交流を促進した。また、2018 年度シンポジウムでは、ジョルダン・サンド氏（ジョージタウン大学・日本近代史）による研究発表が行われた。 3.　④に関しては、各シンポジウム、PDにおいて梗概集を編集・発行した。 4.　2006 年度から WG が設置され、若手研究者の積極的な参画と研究成果の共有が実現された。 5.　『建築雑誌』2015 年 5 月号に同小委員会+WGを中心に特集「都市史から領域史へ」を刊行した。 6.　2019 年度建築学会大会（北陸）研究協議会「都市と大地　その可能態」として、2014-2017 年テーマ「都市と大地」の総括を行い今後の展開可能性を探求した。
委員会活動の問題点 ・課題	1.　2014 年度以降、毎回、シンポジウムを開催するにあたり、小委員会委員以外から異分野の専門家を招聘した。2022 年度シンポジウムには、他分野の専門家も含め 4 名のゲスト講師を招いた。このように、本小委員会の活動は、年々広がりを見ている。今後も一層、多様で幅広い分野との研究交流を積極的に図ることが望まれる。 2.　大会学術講演の発表部門として建築歴史・意匠の中に「都市史」のカテゴリーが確立され、小委員会の活動がより開かれた形となった。さらなる都市史研究のすそ野拡大と継続的な発展のために、若手研究者を中心としたWGが 2006 年度に設置された。しかし、WG 活動に対する予算割り当てがなく、遠方からの参加が困難といった活動への制限があり、改善が期待される。また、コロナ収束後も、地方の若手研究者が参加しやすいよう、リモート開催への支援（ex. zoom 等の利用権限付与）を期待したい。 3.　本小委員会委員は専門を考慮しながら全国各地から幅広く集められ構成されている。リモート開催を活用しつつ、できるだけ委員ならびにWGメンバーが対面で交流し議論できる機会を設けていきたい。